大阪女学院大学・大阪女学院短期大学　教員養成センター

〈英語教育リレー随想〉 第 97 号　　2018 年 4 月

『君たちはどう生きるか』によせて

東條　加寿子

『君たちはどう生きるか』が、今、社会現象になっているという。

『君たちはどう生きるか』は 80 年前の 1937 年、第二次世界大戦に向かって暗雲が立ち込める状況下で、「日本少国民文庫」全 16 巻の第 12 巻として吉野源三郎が子どもたちのために書き下ろした一冊である。父を亡くした中学生の主人公が、叔父との対話を通して、日常の体験から社会の仕組みや社会との関係性を学び、その中から自分自身の倫理観を確立していくという「倫理本」であるともいわれる。2017 年 8 月に羽賀翔一が漫画版を出版して以来、新装版と相まって、これまでに 200 万部を超えるベストセラーになっている。これらとは別に、岩波文庫版もベストセラー入りをしているのだから驚きである。私は岩波文庫版を読んだが、岩波版では巻末に付載されている丸山真男の「『君たちはどう生きるか』をめぐる回想」が、本書に時代性と普遍性のコンテクストを与えている。とにかく世代を超えて、本書に託された何かが私たちを捉えて離さない。

本書はさまざまな読み方ができる。主人公が体験するエピソーを楽しむ小説のような一冊として。悩んだりつまずいたりしたときの救いの一冊として。あるいは、学ぶということは本質的にどういうことなのかを考えるための一冊として。つまり、生きていくということは結局どういうことなのかを考える一冊なのである。読み進めるうちに驚くのは、いじめや格差といった一見現代的な問題が、80 年前にも同じように存在していたことである。「人権」といった現代的な概念でくるむまでもなく、子どもたちが成長の過程で学校や家庭で直面する普遍的な課題を素朴にかつ真剣に語っている。

本書は、「貧しき友」「雪の日の出来事」「石段の思い出」といった日常の物語の中から、叔父との対話を通して主人公の道徳観や倫理観が次第に確立されていく過程を綴っているが、考える基盤として「学問」に大きな価値を置いている。天動説から地動説へのコペルニクス的転回、ニュートンの万有引力の法則、自然科学から歴史に目を転じてナポレオンの偉業、そしてガンダーラの仏像の話まで、人類の叡智を通して主人公は思考し気づきに辿り着く。「人間は、どんな人だって、一人の人間として経験することに限りがある。・・・だから僕たちは、できるだけ学問を修めて、今までの人類の経験から教わらなければならないんだ。」（岩波文庫版、1982 年、94－95 ページ）

学びの意義を平易に説くとともに、本書はまた、一人ひとりが社会と関わり何らかの役割を果たしていくことの大切さを投げかけている。「君は、・・・たしかに消費ばかりして

いて、なに一つ生産していない。しかし、自分では気がつかないうちに、ほかの点で、ある大きなものを、日々生み出しているのだ。それは、いったい、何だろう。」と。（同、141ページ）そして、それがいったい何なのかは最後まで語られていないところに、生きる希望がある。

今の時代に、このような本がベストセラーなったことは救いである。「どう生きるか」の普遍的な問題について、今も昔も私たちは答えを出したいと考えている。そして、教育のあり方を日々模索している私たちにとって、本書が示唆するものは大きい。「主体的な学び」のもつ意味を、『君たちはどう生きるか』の視点から捉え直してみてはどうかと考えている。

（東條加寿子　教授／教員養成センター）